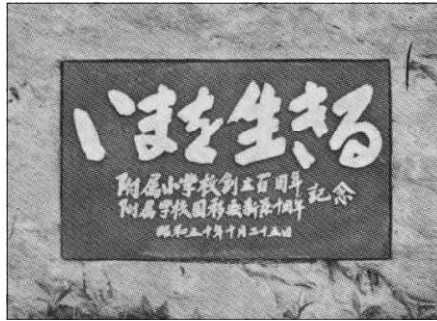


いま生きる

「いまを生きる」(創立百周年・移転新築十周年記念碑)の制作秘話 当時の校長先生からのお手紙より

附属創立百周年は、私の在任のころにめぐって来ました。いろいろな記念行事が行われましたが、ただのお祭り騒ぎに終わらせてはならないという教職員の高揚した気持ちをうたい上げるものの一つとして、あの記念碑の建立が実現することになりました。

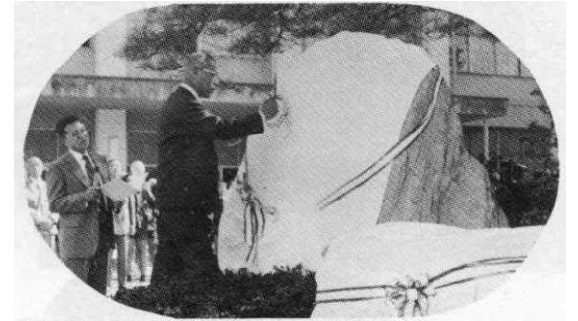


① できた頃の記念碑 (1975年)

代表者が何回か集まっていろいろ話しあいましたが、当時中学校の副校長だったY先生の提示された「いまを生きる」が最終的に記念碑にいちばんふさわしいと全員賛成で選ばれました。これには「今に生きる」という言葉もあるとの意見もありました。この方が、一見「今を生きる」がごつごつした、かたい感じを受けるのに対して、「なめらかでやわらかな印象を受ける」と評価されました。「に」と「を」の僅か一字のちがいです。声に出してみると「今を生きる」と「今に生きる」では、一字のちがいとは思えないほどの大きな差があることがわかります。

「今を生きる」と「今に生きる」の二つの言葉について議論を重ねた結果は、形の上ばかりでなく内容の面でも一字のちがいですまない大きな差があると、出席者がみなで認めることになりました。

「今に生きる」では「今」は人間とは別の存在であり、人間は受け身の形で「今」に対応することになる、それでは人間は「今」に対して主体的に働きかける余地がない。



② 記念碑の除幕式 (1975年)

い。それに対して「今を生きる」では人間は主体的能動的に「今」に働きかけ、「今」を作りあげることになる。いま附属は創立百周年を迎えた。我々はその光栄ある歴史と伝承を継承しつつも、今後は新しい附属、新しいその未来を創造してゆかねばならない、いまこそ新たなる附属の船出の時である。その高らかな宣言を「今を生きる」という言葉に凝縮させよう。> 議論はそんなところで大団円となり、その執筆をM先生に委任しました。

人間の顔つきにそれぞれ特色があるように、文字にもそれぞれ顔のようなものがあると、書道家たちは言い、それを字面(ジツラ、文字のそれぞれもつ顔)とよび、展覧会に出す書の作品、ことに短い言葉で表現する場合は、字面をえらぶということです。

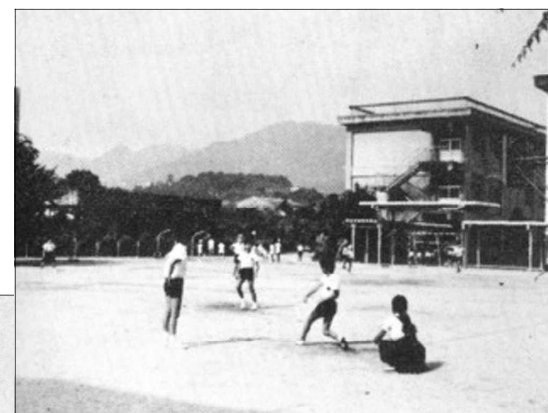


③ 記念碑ができた頃の前庭

「今を生きる」を「いまを生きる」と書いたのは、揮毫したM先生が字面を重く見たからです。『今』はやや固い、人に語りかけるようにやさしく表現するには平仮名の『いま』でなければならぬ。反対に『生きる』は『いきる』としたのでは力強い印象を見る人に与えない、ここは人間の意志をはっきり示すために、漢字の『生』を使うべきだ、『いまを生きる』とした方が『今をいきる』よりも親しみがあり、『生きる』にぐっと力が入ってくる。」そういったことがMさんの主張だったように思います。私もそれに全面的に賛意を表しました。

昨日のスタジオパーク（NHK）に出演した聖路加病院の院長だった日野原重明先生も「いのちとは『今を生きる』ことだ、過去はもうない、未来は文字通りまだ来ていない、生きるとは時間を生きること、目の前の時間を生きること、つまり今を生きることだ、今を充実させて生きることが、今をせいっぱい生きることだ、いのちとは今を生きることだ」この先生の真意をどれほどとらえているかわかりませんが、先生のいわれたことばを私の記憶の中できみだててゆくと、そんなことになります。「今を充実させること」とか「今をせいっぱい生きる」とは、「人間が主体的に今を作る、歴史を作る、新しいものを作る」といったことになろうかと思えます。

平成21年（2009年）7月7日



① 記念碑ができた頃の中庭



② 1975頃の中庭（現：保健室・家庭科室付近）



③ 1975年頃の校舎全景